

昭和28年6月に九州をおそつた大水害の概要

佐藤 健吉

九州農業試験場

SATO, K. The Outline of Flood Damages Occurred
June 1953 in Northern Kyushu

I. 水害をひき起した当時の気象

昭和28年九州地方では5月下旬から連続降雨がみられ、梅雨の始つたのは例年より半月も早いのかかわらず、明けたのは平年より10日もおそく、したがって梅雨期間は著しく長かつた。その期間内で水害を起したものは6月4～7日における台風第2号の九州中部横断に伴う大雨と、6月25～29日の九州中部、北部を襲つた梅雨前線の活動に伴う大雨で、特に後者はいわゆる九州大水害の原因となつたものである。

当時の梅雨前線の活動を福岡管区気象台の報告によつて見ると6月下旬に南九州を東西にのび、狭い範囲を南北に振動していた梅雨前線は25日の早朝から北に移動し始め26日には九州の中北部に達し、25日の午後から26日にかけて長崎県、佐賀県、福岡県、大分県等に大雨をもたらした。

26日の昼前ごろに他の前線があらわれ、中部九州を東西に走り停滞していたが、その後これが南下し始め、その南下の際熊本から阿蘇山一帯に極めて多量の雨を降下した。一旦南下した前線は再び北上し、北九州に再び大雨をもたらす等梅雨前線の北上、南下、停滞等によつて未曾有の大雨を記録した。

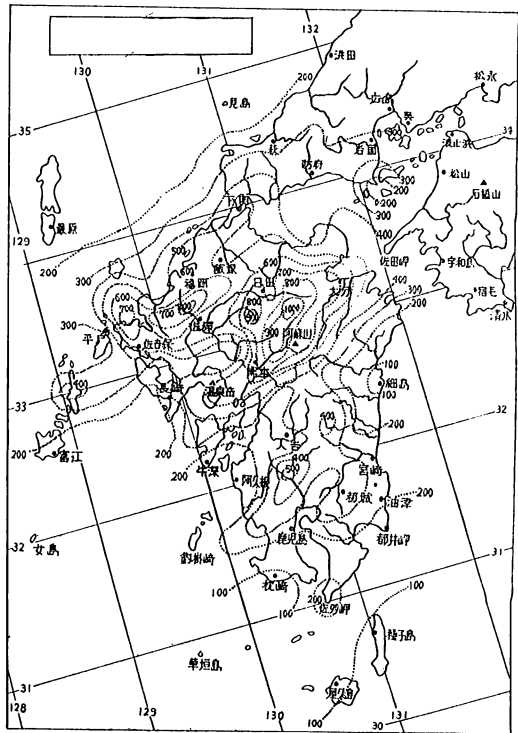
II. 降雨と雨量

これら梅雨前線の移動によつて、まづ6月25日から26日にかけて、筑後川上流域と佐賀地方に400ミリ以上の降雨区域が見られ、そのため最初に筑後川、矢部川及び嘉瀬川が氾濫した。26日から27日にかけては熊本市周辺及び阿蘇山附近で400～500ミリ以上の区域がみられ、これが白川に流れこんで熊本市及びその下流地域の水害を起し、また28日には北九州の関門を中心として250ミリの強雨があつて、関門トンネルの浸水や門司市の山崩れ等を惹起した。

この期間の日々の雨量は第1表の如く、25日より29日まで5日間の降雨量は600～700ミリで、特に阿蘇、九重山及び矢部川上流、佐賀山間等では800ミリ以上を示し、熊本県北部の小国町では実に1,000ミリを突

破した。またこれらの地方の日雨量の最大は25日或は26日にあらわれ、平坦部では350ミリ山間部では400ミ리를越えた。九州農試(羽犬塚)の観測によれば1時間の最大雨量は26日7～8時の間に84.3ミリを示し梅雨前線としては過去に類例のない強雨であつた。

第1図 6月24日より30日までの降雨量図



III. 農業に及ぼした被害の概要

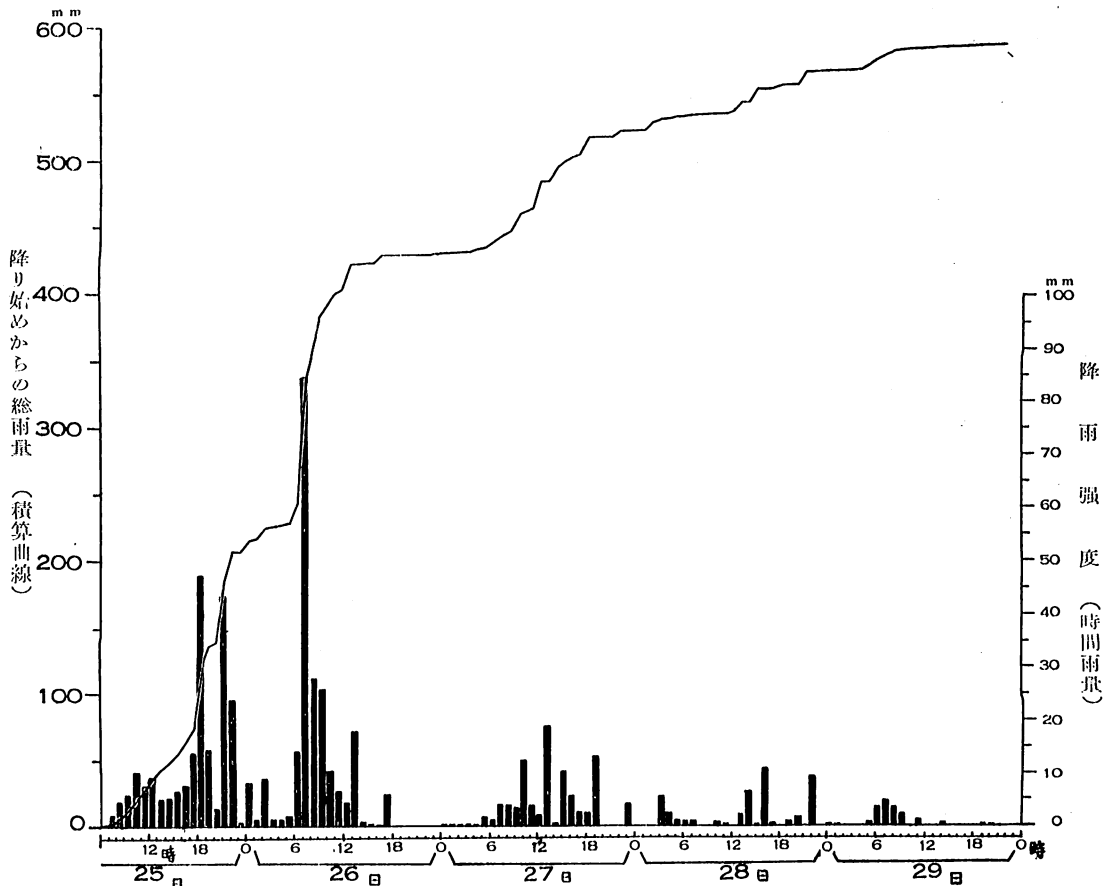
1. 冠水による被害

筑後川、矢部川、遠賀川(福岡県)菊池川、白川(熊本県)嘉瀬川(佐賀県)大分川、大野川(大分県)等の各河川の氾濫によつて、広範囲のこれら下流地帯が浸水した。水田のみについてみてもその冠

第 1 表 昭和28年6月24～29日雨量表 (9時～9時mm)

場 所	24日	25日	26日	27日	28日	29日	24～29日	年平均
福 犬 羽塚 佐賀 長崎 熊本	0.9	307.8	25.7	119.9	168.0	1.2	623.5	1,566.8
	6.4	349.1	83.9	88.0	43.7	4.0	575.1	1,746.7
	4.0	366.5	98.6	99.7	27.2	4.1	600.1	1,745.2
	27	62	102	5	39	10	245	1,894.1
小 蘇 阿山 日川 大分 宮崎 鹿島	21	76	412	36	72	13	630	1,704.7
	4	434	210	209	133	10	1,000	2,179.0
	16	104	432	55	143	35	786	2,768.9
	13	292.4	127.8	178.9	99.0	5.5	718.4	1,755.2
大宮 鹿島	0	197.7	223.1	143.6	140.0	8.9	713.3	1,562.4
	27	34	31	26	16	111	245	2,494.0
	53	13	18	2	29	92	207	2,071.0

第 2 図 昭和28年6月25日より29日に至る豪雨 (福岡県糸島郡)

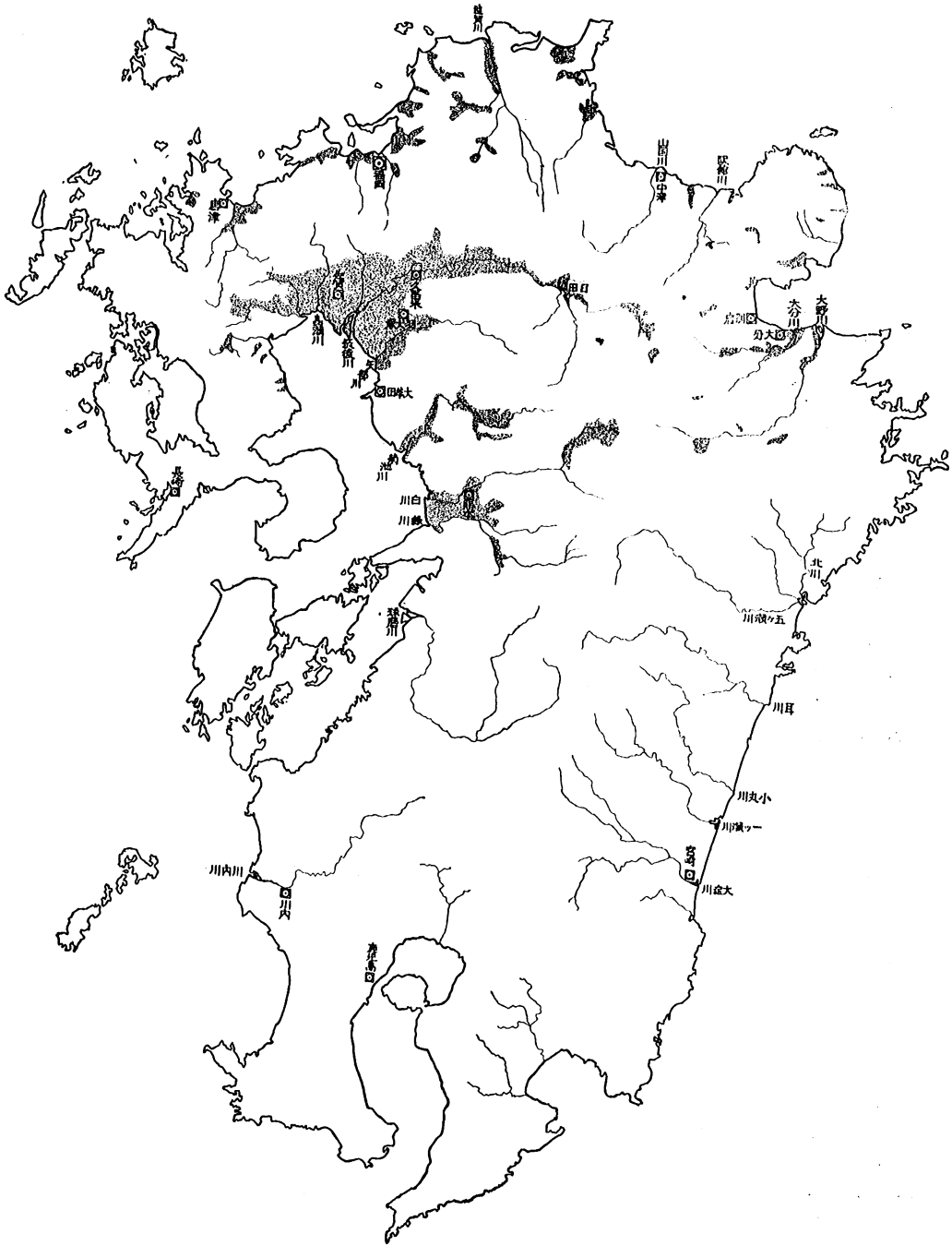


水面積は14万町歩を越え、全九州水田面積の35%に達し、3日以上冠水をみたものでも5万6千町歩を越えたものとされている。

水害当時の天候が雨天或は曇天であり、気温や水温が比較的低かつたため(九州農試の観測では22

～23°C)3日以内の冠水では苗代または移植後の水稲にもさしたる被害は見受けられなかつたが、5日以上に及んだ場合には、苗が徒長、軟弱となつて多くは倒壊し、その甚だしいものは枯死したものも少くない。

第3図 昭和28年6月末の九州の水害地域



しかも冠水地帯は筑後平野、佐賀平野、熊本平野等の九州では最も肥沃地帯であり、広範囲に亘っているので農業上に与えた被害は最も大きい。

2. 耕土流失，土砂埋没

しかし以上河川の上流または中流地域においては急激な水流によって水田の耕土が流失し耕盤を露出

第2表 水害の被害面積
(農林省統計調査部九州指導官室による)

縣名	冠水面積(町)			3日以上冠水(町)		
	植付済	未済	計	植付済	未済	計
福岡	17,789	37,392	57,183	4,392	21,914	25,306
佐賀	3,627	33,953	37,580	659	18,381	19,040
長崎	2,163	6,143	8,306	611	839	1,450
熊本	5,349	25,778	32,127	701	6,292	6,993
大分	8,926	4,543	13,469	1,765	921	2,686
計	37,854	110,811	148,665	8,128	48,347	56,475

したもの、或はその上に上流からの土砂、石礫等が堆積したもの等が各所に見受けられた。特に筑後川流域の福岡県朝倉郡、浮羽郡の大福、筑陽、大橋村では耕土流失、土砂堆積の被害が多く、白川下流の熊本市及び小島町では一面火山灰土の泥土によつて苗代及び本田が埋つたため甚しい被害があつた。

3. 用排水施設の破壊

洪水によつて灌漑、排水施設が破壊されたため、灌漑が不能になつて、そのため植付不能、または給水不能による旱害等もたらされた。また用排水施設は破壊されなくとも、泥土堆積によつて田面が給水路よりも高まつたため、灌漑不能となつたものもあつた。

4. 収穫物の浸水による被害

なおこれら被害の外に麦類、なたね、ばれいしよ等前作の収穫物が浸水によつて腐敗を来した数量も極めて大きいと考えられる。

IV. 水害後にとられた対策

水害に際してとられた対策は被害の様相によつて必ずしも一律でないが、その大要は次の如くである。

1. 苗代における対策

1) 冠水苗代の回復

冠水苗代の対策としては苗に附着する泥土の洗い落とし、葉先剪除、少量の追肥による回復促進等によつて苗の確保につとめた。

2) 晩播苗代(追播苗代)の設置

しかし冠水が長期に亘つて苗が著しく被害を受けた場合にはむしろこれを放棄し、新たに苗代を設置して晩播を行つたものも多く、水害の激甚地では東北地方から送られた陸羽132号を、7月15～16日頃に播いたものもある。

この際の苗代としては播種限界を7月20日迄とし如式整地折衷苗代、または畑苗代とすること。肥料は窒素を減じて加里を増施すること。坪3合播反当20坪とし、必ず芽出播をすること等が指

導された。

3) 土砂堆積苗代

また苗代が泥土によつて埋没した場合には、その程度の1～2寸の場合にはこれをかき去つて苗代を存置したが、3～4寸以上の場合には新たに晩播苗代を設けた場合が多い。

2. 本田における対策

1) 移植後水害を被つたもの

本田移植後に冠水したものは、新根発生のきざしのあるものは根替えをしないで少量の追肥、軽度の中耕によつて回復をはかつた。

しかし大部分の水田は移植前のものが多いため苗を如何にして得るかに大きな問題があつた。

2) 輸送苗の利用

災害地に非災害地の近村から、または隣県から輸送苗が送られ多く利用された。遠いところでは香川県等から送られたものもあるが、輸送期間が長い場合には苗が衰弱して、活着及びその後の生育も不良であつた。

3) 晩播晩植

水害後晩播苗代によつて育成した苗を7月20日以後8月上旬にかけて移植を行つた。この場合には品種は中性種または早生を用い、肥料も窒素を減じ加里を増し、植付株数は5割以上の密植をすべく指導された。

水害地における晩播晩植の結果は、その後の天候の順調であつたことも幸いし玄米収量2石5斗を突破するものもあつたが大多数のものは2石内外で平年の6～7割の収量をあげることが出来た。

4) 直播栽培

退水と同時に水害地に種籾を直播した場合も相当見受けられた。多くは水田が泥土によつて埋没したものに行われた。発芽は概して良好であつたが、ところによつては栄養成長が盛んとなつて過剩分けつを生じ、前穂期、成熟期がおくれ一部穂首イモチ病の発生を見た。

3. 代作

土砂による埋没、用水関係から水稻の作付が不能となつた地帯では陸稲、秋大豆、甘藷、秋馬鈴薯、そさい、粟等の代作を奨励したが、その結果は不馴れの点もあり、一部を除いて概して予期の成績をおさめることが出来なかつた。

以上は昭和28年6月下旬の九州大水害について農業上に及ぼした影響及び対策について概要をのべた。これらの実態並びに技術的対策の成果の詳細については、本身に気象、作物、土壌肥料、病虫害、経営、生活等の各部門に亘つて報告されている。貴重な参考となるものと信ずる。